

大学コンソーシアム京都 産学連携教育プログラム
プロジェクト企画実践コース プロジェクト報告書

【実習先名】 一般社団法人 Impact Hub Kyoto

【実習生氏名】 山岸 優介

杉本 諒仁

【提出日】 11月15日（金）

【報告書タイトル】 花背フィールドラボプロジェクトで得られた学び

私たちは、産学連携教育プログラム（以下、当プログラム）において、一般社団法人 Impact Hub Kyoto（以下、当実習先）に実習生として参加し、花背フィールドラボプロジェクト（以下、当プロジェクト）に取り組んだ。まず、この報告書の構成を述べる。第一に、当実習先及び当プロジェクトの活動概要の紹介、第二に、私たちが当実習先を選んだ理由、第三に、今年度の主な活動内容の紹介、第四に、今年度の私たちの企画内容とその成果、第五に、当実習先の活動を通じての私たちの心境の変化を述べ、報告を終える。

当実習先は、「Hub」という言葉が表すように、様々な人々や活動の中心に入り、互いに結びつける役割を担っている。その活動の一端であるのが、当プロジェクトである。当プロジェクトでは、花背地域を舞台に、その地域に根づく地域の文化、伝統、人々の営み、自然、風土などの地域資源を生かした地域の活性化や関係人口の増加に向けた魅力の発信、移住者の長期的な定住を目指した地域の現状などの情報提供を目的に行っている。そして、当プロジェクトの目標は、地元の方々と交流することである。この関係性を育むことが、先述した目的には不可欠だ。その効果に関しては、後述する。ここで、当プロジェクトにおける地域の定義について述べておく。今回、活動する中で、私たち自身も、地域の定義に関する勘違いを起し、地元の方の誤解を招いた。「はなせ」に当たる漢字には、「花背」と「花脊」がある。当プロジェクトの活動対象地は、別所町・花脊町・広河原町を総称した地域であり、前者の「花背」がそれに当たる。

続いて、当実習先を選んだ理由を実習生各自が述べる。山岸の理由としては、人々の交流や自然豊かな地域を好む元来の性に加え、見知らぬ土地の産業に触れ、その地域が抱える課題について考え、解決に向けた一助になりたいと思ったからである。杉本の理由としては、第一に、当プロジェクトに参加し、最後までやり遂げることができれば、自分の成長に繋がると思ったからである。第二に、得意ではないが、好きではある、人との関わりを強く感じられ、人付き合いを少しでも向上させる経験を、得られると考えたからである。

次に、今年度の当プロジェクトにおける主な活動内容に関して、三点に絞って述べる。

一点目は、7月7日（日）の花背地域への初訪問時の活動である。当日の活動は、広河原里山野菜加工グループ会長（ヒアリング当時）の新谷 久利様、広河原薪炭再生集団代表（ヒアリング当時）の段下 健二様、古民家民宿兼レストラン Hanase Highland Inn を経営するケルガードご夫妻、花脊別所チマキザサグループ代表（ヒアリング当時）の藤井 優三様にご挨拶及びヒアリングを行った。この日、特に印象に残っている事柄は、藤井様を訪問した際に、私たちが訪問以前に考えていた課題とのギャップに気づいたことである。私たちが訪問以前の講義にて、当実習先代表の浅井 俊子様との対話の中で、抱いた課題は、「チマキザサを収穫する担い手不足」であった。その段階で、考案していた企画内容は、花背地域への関係人口増加を目的に、花脊別所チマキザサグループの方々の手解きの下、初訪問する人々を参加者に迎え、チマキザサの収穫を体験するワークショップを行うことである。しか

し、実際に、藤井様にヒアリングを行ったところ、チマキザサ収穫の初心者を山へ入れることは危険であり、指導者側の数が少数であるため、参加者の安全の確保まで手が回りにくい点及び担い手不足に加え、指導者側の高齢化も進行し、健康への配慮が不可欠となっている点の大きく二点の実施する上での課題が浮かび上がった。これらの点を受け、私たち自身もチマキザサの収穫をした経験が無く、初心者に分類されるため、ワークショップにおいて、指導補助の役割を担うには、収穫方法の習得が不可欠であり、当プログラムの実施期限である6ヶ月以内には実現が難しいことが示唆された。以上の点から、初訪問日は、現地に赴くことで、課題が変化する点及びプロジェクトの企画過程において、それに対応する力が試される点を実感することができたため、報告に値する日となった。

二点目は、8月3日（土）から4日（日）にかけて、1泊2日の花背地域の風土を体感する体験を行ったことである。

初日には、当実習先代表の浅井様のご親戚や地域に在住する人々が、浅井様が借用されている古民家に集い、昼食準備及び飲食を通じて、交流を深めた。ここで、当実習先の紹介において、先述した地元の方々と交流を図るという目標の効果を述べる。飲食を通じての交流と言え、一見、「飲食しているだけではないか」という意見が出てくるであろう。しかし、このように飲食を通じて、会話を行うことで、私たちのような地域の実情をほとんど知らない者にとっては、地域の方々との関係を構築するきっかけを与えてくれる重要な活動である。関係を築くことは、プロジェクトを実行していく上で、不可欠であり、関係者を増やすことで、活動運営や活動援助等を円滑に進めることへと繋がり、実行者側にとっての関係者の存在は、心強いのではないだろうか。また、夕暮れ時に、花背山の家の方まで散歩を行った。夏季にも関わらず、心地よい風が吹き、暑い夏を忘れさせる一時となった。初日は、以上のような交流の意義を認識し、気候を体感した。

二日目は、広河原里山野菜加工グループ会長の新谷 久利様をはじめとする広河原自治振興会の皆様が共催されている広河原里山フェスティバルに参加した。この日は、花背地域の特産品の紹介及び地元で生産された原料を使用した飲食物や特産品の販売、サウナ体験、地元の木材を使用したウッドクラフトワークショップが広河原トラウトタウンで行われた。また、付近を流れる上桂川では、生き物観察や鮎のつかみ取り体験が行われた。私たちは、会場から少し離れた広河原里山野菜加工グループの発酵工房前にて、来場者への駐車場への誘導及びリユース市の常駐スタッフの役割を担った。二日間を通して、花背地域の風土を体感することができた。

三点目は、当報告書において、度々、登場されている広河原里山野菜加工グループ会長の新谷 久利様のご指導の下、9月17日（火）に実施した茗荷の漬け込み準備体験及び同月21日（土）に実施した茗荷の収穫体験である。新谷様は、茗荷及び茗荷を使用した花街茗荷の漬物、虎杖の塩漬、ふき鯖味噌も生産されている。

まず、9月17日（火）に実施した茗荷の漬け込み準備体験では、紫蘇の葉を摘み、紫蘇の葉、胡瓜、唐辛子、茄子を水で洗浄した。この洗浄に使用する水も井戸水であるため、自然の恵みを肌で感じる事ができた。その後の作業は、プロの手が命となるため、見学をさせていただいた。漬け込み時を中心に、働きに来られている地元の方が、手際良く、これらの野菜を刻み、10kgずつに仕分けを行った。そして、仕分けされた10kgずつの野菜を、その時々材料の量によって決まる塩の配合量と共に、全体に塩が馴染むように丁寧に混ぜ合わせをされていた。今回は、三つの漬物樽に入った花街茗荷の漬物が完成した。漬け込み開始から20日間漬け込むそうである。実際、他の漬物樽の蓋の淵には、白カビが生え始めており、新谷様によれば、美味しい証拠であるという。

続いて、同月21日（土）の茗荷の収穫体験では、午前中は、茗荷畑にて、茗荷の収穫を行い、午後は、収穫した茗荷の洗浄および一番外側にある皮をむく作業、パック詰め作業を行った。午前中は、茎の根元に存在する茗荷を土の中から掘り出した。山岸は、茗荷の生え方を初めて知ると共に、大ぶりで、鮮やかな赤色といった広河原産独自の茗荷の魅力を実感することもできた。このような魅力があるため、収穫を行った9月中旬には、育ち過ぎた茗荷もあり、花を咲かせたり、土から一部を出し、少し赤黒くなっていたりする茗荷も見られた。怪しげな空模様であったが、小雨程度で済み、作業に集中することができた。

午後は、水による洗浄および一番外側の皮をむくことで、土を洗い出し、大ぶりと小ぶりに仕分けを行った。外側の皮をむく際、V字になっているところに、ナイフをあてれば、むきやすいということを教わった。また、山岸としては、洗浄槽を囲み、黙々とした作業に落ち着きを見出したこと及び新谷様に「根気強いなあ」と言ってもらったことが忘れられない。

上記の活動を踏まえ、私たちは、今年度の当プロジェクトの企画を立案した。企画の目標として、「花背地域の魅力を伝える」を掲げた。この目標を遂行するにあたり、アウトプット案を考えた。私たちは、第一案として、特産品を展示することを構想した。しかし、アポイントメントを上手くとることができない点及び「特産品の展示に意味はあるのか」という問いに直面した。そこで、第二案として、展示という言葉から思い浮かべられた媒体が、写真、パネル、スライドショーであった。この案ならば、私たちにも実行可能であることが示唆された。そして、私たちが体験した活動の紹介や活動する中で撮影した風景写真も素材に取り入れたパネル展示を開くことに至った。次に、会場に関してだが、当実習先代表の浅井様のご紹介によって、訪問させていただいた左京区役所地域力推進室企画課長（ヒアリング当時）の矢野 裕史様にご提案いただき、花背山の家協会主催の「花背リゾートオータムフェスタ2024」（以下、オータムフェスタ）に出展させていただくことになった。また、パネル作成には、浅井様のお知り合いであり、デザイナーの中家 寿之様にご指導、助言をいただいた。

上記のように、媒体が事の成り行きに沿って決定した部分があったため、パネル作成の段になって、「本当に魅力が伝わるのか」という問いが始終、頭の中をめぐり、心が揺らいでいたが、中家様が画面に余白のないA3サイズのパネル作成を実例で示していただいた際に、画面から受け取れる圧倒感を受け、魅力を伝えられる可能性に気づき、A3サイズのパネルを12枚作成することに決定した。12枚の内訳としては、茗荷の漬け込み及び収穫体験時の活動内容を示した3枚、ニホンミツバチ採蜜ワークショップの活動内容を示した3枚、実習生双方が印象に残った風景写真等を示した3枚ずつである。さらに、茗荷の漬け込み及び収穫体験の活動内容+山岸が印象に残った写真、ニホンミツバチ採蜜ワークショップの活動内容+杉本が印象に残った写真と6枚ずつに分け、テーブルに交互に、設置するように考案した。

当プロジェクトの目標は先述したが、目的は「花背地域への再訪を促し、当地域への関係人口を増加させる」である。ここで、アウトプット（産出）とアウトカム（成果）についても言及する。アウトプットは、当プロジェクトの産出物である「花背の魅力が伝えるためのパネル」だ。そして、アウトカムが、「花背地域への再訪回数に伴った関係人口増加」だ。

加えて、アウトプットKPIとアウトカムKPIに関して言及する。私たちが立てた当プロジェクトのアウトプットKPIは、『オータムフェスタ来場者の75%に、「花背地域の魅力が伝わった」と言ってもらえる』であり、アウトカムKPIは、『オータムフェスタ来場者の10%が、イベント後、5回以上再訪する』だ。とりわけ、アウトカムKPIの指標を確かめるために、パネルに加え、グーグルフォームのアンケートを作成した。質問内容は、「来場者の所在地域、花背地域及びオータムフェスタをどのように知ったか、花背地域に再訪したいか」である。

次に、オータムフェスタ当日を振り返る。本来は、オータムフェスタの実施に、11月2日（土）、3日（日）両日の開催が予定されていたが、台風の影響のため、3日（日）のみの開催となった。当日は、来場者数が少なく、B2サイズの看板も用意したが、何を催しているのかが来場者に伝わっていなかった。声をかければ、対応してくださる家族連れの方もいたが、素通りあるいは、顔があったとしても、ドライな視線を浴びせるだけに留まる来場者の方が大半を占め、積極的な関わり合いを図ることができなかった。そのため、アンケートへの回答も少なく、KPIを示す程度の回答数を得ることができなかった。しかし、少数であったものの、対応してくださった方々との会話をする時間が設けられたであろう。

課題としては、私たちの呼び込み力、催しているものの正体が一目で分かる展示会名等を記載した看板、実際に素材に触れられるコーナーの設置や小さなお子さんであっても楽しめるワークショップの実施、個人情報という壁があるため、難しいかもしれないが、アウトカムKPIに設定した再訪回数を測るためのメールアドレスの入力項目をアンケートへ設置すること、実現可能性のある範囲内でのKPIの指標の提示が挙げられる。

最後に、当プロジェクトを通じての心境の変化を実習生各自が述べる。

山岸としては、訪問当初、地域の方々に馴染めるかどうか不安であったが、人々の営みに触れたり、地元の方々に受け入れてくださったりした中で、その不安が解消され、人々の繋がりや輪が広がることによって、地元の方々がプロジェクトの伴走者になり得るという可能性を感じ取った。

杉本としては、活動当初、この活動においてどのようなことをしていくのかが、はっきりしておらず、事の成り行きに沿って動いていた節がある。だが、アウトプットであるパネル展示の展示に向けて動き出す中で、主体的に動くことが難しい際もあったが、いざとなれば、やればできる自身の可能性に気づくことができた。

以上で、報告を終える。